

の1.5倍の成長が認められ、オトガイ軟組織の前方移動がみられたが、中顎面下顎面の相対的な位置関係には有意

差が認められなかった。

29. 精神薄弱者の歯周疾患初期治療及びメインテナンス —10年間にわたる治療効果—

清水 学, 文田博文, 坂東省一
稻場昭人, 加藤義弘, 藤井健男
石井克枝, 平松智一, 奥村 浩
牧野隆樹, 松尾廣久, 石岡高志
大井戸真理, 河合 治, 野村昌人
高松隆常, 小鷺悠典

(歯科保存 I)

目的 心身障害者に対する口腔の健康管理はきわめて遅れており、特に歯周疾患の診査や治療に関する報告は少ない。本研究の目的は、精神薄弱者の10年間の歯周組織の変化を分析し、歯周組織の健康を維持するために必要な方法を検討する事である。

研究対象および方法 新篠津村の精神薄弱者更生施設「更生園」に入園している有歯頸の成人45名を対象とした。年齢は、昭和55年の初診時で17~52歳、平均33.1歳であった。最初に日常の生活指導をしている指導員にブラッシングの重要性の認識とブラッシング方法を習得させた後、精神薄弱者のブラッシングの習慣化を計った。初診時から2年間で全員が初期治療を終了、その後6ヶ月毎に指導員を交えたブラッシング指導とスケーリングを中心としたメンテナンスを現在まで継続している。

結果及び考察 本研究は、歯科医師や衛生士が精神薄弱者に直接指導するのみでなく、施設の指導員が毎日の生活中で口腔清掃指導できる体制をとり、口腔清掃の強

化を計りながら6ヶ月毎の定期的な口腔清掃指導とスケーリングを行い歯周組織とその機能維持への効果を検討した。その結果、イニシャルプレパレーション中にPCR, Modified GI, PoRが著しく減少し、10年後の現在もほぼ一定の値を維持している。さらに喪失歯数も低く、効果的なメンテナンスである事が裏付けられた。長期に渡る本研究では、指導員の退職等による口腔清掃指導力の低下や新指導員への新たなモチベーション及び指導が必要である。さらに、歯周組織の健康の悪化が見られる症例も一部あるので現在行っている6ヶ月というリコール感覚を短縮する事も検討中である。

結論

1. 本法は、歯周疾患の治療、維持に効果的であった。
2. より効果的にするには、メンテナンスの期間を短くする必要が考えられ、また指導員への新たなモチベーションが必要である。

30. 重症心身障害児者における栄養評価法の検討

渡部 茂¹⁾, 上田正彦¹⁾, 五十嵐清治¹⁾
市田篤郎²⁾, 岡田喜篤³⁾
(小児歯科¹⁾, 口腔生化学²⁾, 社団法人札幌あゆみの園³⁾)

【目的】 一般に重症心身障害児（者）は生活が抑制され、摂食法にも制限があるために栄養状態が良好とは言えない例をみるとが多い。なかでも臨床上、特に重要な思われるものは蛋白栄養障害であり、これが進行すると創傷治癒遅延、易感染性の増加など、様々な悪影響がもたらされることが知られている。これら重症児（者）

に対する栄養評価をより的確に行うための基礎として、今回特に蛋白栄養状態を中心に幾つかのパラメーターについて検討を行った。

【方法】 対象は重症心身障害児（者）施設の入所者で、4歳から58歳の男女計114名について、身長体重測定、皮下脂肪測定、尿中クレアチニン排泄量の測定を行った。

次にこれらのうち肝腎疾患などを有していない男女計52名について、Rapid turnover protein(RTP), 「プレアルブミン(PA), レチノール結合蛋白(RBP), トランスフェリン(Tf)」(血漿蛋白定量用免疫拡散板使用), 及び補体価(NewワンポイントCH50使用)を測定した。なお、コントロール群として本学学生10名を用いた。

【結果】 1. 体型評価の歳にはプローカー法により皮下脂肪厚を測定して行う方法がより的確と思われた。皮下脂肪厚測定の結果、体型がやせ、中等度、及び肥満と判定された者はそれぞれ約4%, 75%, 21%であった。

2. 尿中クレアチニン量はクレアチニン酸が骨格筋に多く存在していることから、体重よりも身長と対比させて考えた方が効果的と思われた。また、ヤセのグループは筋肉の発達が不良の傾向にあることがうかがわれた。
3. RBP, CH50の値はコントロール群より低く ($p < 0.001$)、また寝たきり、座れる、歩行障害など、運動機能が制約されている群のPA値は、歩ける、走れる群より低い値を示した ($p < 0.02$)。これらの結果は尿中クレアチニンの低下と合わせて考えると、運動機能の制約による骨格筋の発育低下によるものと推察された。

31. 特別養護老人ホーム入所者の口腔内の状況について

石井郁美¹⁾, 道谷弘之^{1,2)}, 武藤寿孝²⁾

金澤正昭²⁾

(本学社会歯科臨床研究所附属緑星の里歯科診療所, 口腔外科 I²⁾)

近年、高齢化社会をむかえ、種々の精神的身体的障害を持つ高齢者が増加してきており、医療福祉の充実が重要な課題となってきている。このような高齢者では、歯科領域においても、種々の疾患や改善すべき口腔機能を有することが多いにもかかわらず、治療を受ける機会の少ないことが指摘されている。

そこで今回われわれは、特別養護老人ホーム入所者について、口腔内の状態および衛生管理の状況を調査したので、その概要を報告した。

(対象および方法) 特別養護老人ホーム「養明園」の入所者80名のうち、調査可能であった75名（52～96歳、男性20名・女性55名、平均年齢80.4歳）を対象として、歯牙の欠損および補綴状況、床義歯の管理状況などを調査し、併せて精神的身体的障害との関連について検討を

行った。

(結果および考察) 欠損歯の状況では、上下とも無歯頸の者が65%を占め、残存歯が合計10歯以下の者は85%であった。また、全ての者が残存歯20歯以下で、有床義歯の適応と思われた。また、これらの中で義歯を使用していない者は35%であった。床義歯を使用している者の中、着脱・清掃などの管理が自己にまかされている者は63%，第3者の介助が必要な者は37%であった。入所者のうち、四肢ないし体幹の運動機能不全などの身体的障害を持っている者は59%，老人性痴呆症などの精神的障害を持っているものは41%であった。多数歯の欠損がありながら義歯を使用していない者や、義歯の清掃・管理に第3者の介助を必要としている者では、高度の障害を有していることが多かった。